Ｖ－４２　本校舎中学部

１　授業研究会について

月	領域教科名	単元名	対　象	指導者
6 月	総合的な学習の時間	震災復興の学習（ワッフル販売）	AB 組 5 名	佐々木（聡）他 1 名
7 月	理科	イオンの移動	A 組 2 名	大﨑
7 月	作業学習	紙すき	CD 組 7 名 紙工班紙すきグループ	長谷部　他 3 名
8 月	自立活動 日常生活の指導	朝の活動　排泄 食事　運動	D 組 1 名	本木　他 3 名
8 月	作業学習	手芸	C 組 6 名 家政班手芸グループ	涌井 他 1 名
9 月	保健体育	ダンス	ABCD 組	佐藤（礼）他 7 名
10 月	国語	表現しよう	C 組 6 名	中村
10 月	生活単元学習	ダイエットをしよう	1C－2 組 5 名	寺崎　他 1 名

中学部では、A組からD組までの各教科や自立活動、合わせた指導など、様々な領域教科で授業研究会を行った。キャリア教育に関わる単元が多かった領域教科（総合的な学習の時間や作業学習など）だけではなく、色々な学習場面や活動の中で自己有用感の形成や向上につながる支援があることを確認できた。

２　発達段階に応じた自己有用感の形成・自己有用感の向上のための支援について

（１）　授業実践を通して得られた有効な支援

学部授業研究会では、以下のようなことが自己有用感の形成、向上に有効であると話し合われた。

※　網掛けは中学部キャリア教育目標と関わりのある部分

○　集団意識（帰属意識）

＜集団、一体感、仲間意識　他者への意識＞

- グルーピング（大、小）を工夫する。
- 子ども同士の関わりや、必然性のある活動を取り入れ、コミュニケーションを取る場面を増やす。
- 役割分担（流れのある活動）する。
- 言葉以外でのコミュニケーション（声をかけるタイミング、交互に、一緒に等）を取り入れる。
- 相手を意識できる距離や環境を作る。
- ルール作りや、ソーシャルスキルトレーニングを行う。

○　意欲（心の安定）

＜できる　わかる　たのしい　快の気持ち＞

・ 良いところを評価する。
・ 生徒の得意な分野を生かす。
・ 経験を広げるような内容、色々な内容を授業に取り入れる。
・ わかりやすい工夫（繰り返し、視覚支援等教具の工夫、構造化、実体験）をする。
・ 他教科、生活一般とのつながりのある内容を取り入れる。
・ 一人ひとりの特長を生かす役割分担をする。
・ 使いやすい道具、補助具を活用したり、一人一人に適した教材の工夫（数など）をする。
・ 興味のある内容、体験的内容、身近な題材、実験などを取り入れる。

○ **自主性（成就感）**

＜～のために　～するために　責任感＞

・ 目的、目標（具体的、個に応じた、発表等）を自分で設定するようにし、わかりやすく提示する。
・ 役割設定をする。
・ 自分で選択し、責任を持って活動する機会を増やす。
・ 生徒たちが行う活動を確保する。（準備、片付け、教師が持つ等）
・ 本人が必要性を感じる活動を取り入れる。

○ **自己肯定感（心の安定）**

＜うれしい、認められる＞

・ 褒める。
・ 本人が実感できる、わかる褒め方をする。
・ 目に見えない部分を評価する。
・ 友達同士で評価する場を設定したり、第三者からの評価を取り入れたりする。
・ 自分で確認する方法を工夫する。
・ マイナス評価への対応を工夫する。

集団意識、意欲、自主性を養う工夫は関わり合っている。プラスの評価は指導者も生徒同士でも、意識して行うことで、集団意識・意欲・自主性が向上する。また、すべての支援の基礎には、的確な実態把握、健康・体力の維持・向上、教師間の連携が必要となる。

中学部のキャリア教育目標に照らし合わせてみると、網掛けの支援が関連しており、中学部段階の生徒の有用感の形成や向上に有効な支援であると考えられる。総合生活力だけではなく、人生設計力に関わる支援も多く確認された。

（2）　まとめ

中学部は幼稚部、小学部で培われた基礎の上、高等部で自己選択・自己決定する間の、社会生活能力と自己表現力の育成を目標としている。

自己有用感の形成、向上のための支援としては、集団の中でグルーピングを工夫すること、リーダーなどの役割を設定すること、販売活動など必然性のあるコミュニケーションをとる機会を多く設け、その活動の中でルールを意識させることが挙げられる。その際、文字や写真で示すなどの視覚支援が有効であることが確認された。

生徒が楽しい・嬉しいと感じたり、興味関心を引き出したりすることができる内容を学習に取り入れることはもちろん、実際に触れる・見る・やってみるなどたくさんの経験・体験する場を設定すること、自分の得意・不得意などを知る機会を設けることも支援として考えられる。

さらに、目的や目標、責任を持てるように役割などを設定することで、自分から進んで活動する様子も見られた。自己選択、自己決定する機会を増やし、自主性を持てるようにすることも支援の一つとして考えられる。その際生徒が自信を持ってできるように教材教具の工夫が必要となってくる。

また、「ありがとう」という言葉の他、教師が「ほめる、認める」、生徒同士が「認め合う」ことで意欲、自主性の向上につながっていくことが確認された。

一方、基本的生活習慣の確立、健康・体力の向上に関わる支援方法が課題として挙げられた。これは授業だけではなく、学校生活全般で培っていかなければならない事項である。授業研究会の中ではそれに関わる具体的な支援方法についての意見は少なかったが、教師間や家庭との連携を密にしていくことはもちろん、自己有用感の形成、向上に関わる支援を考え、実行していくことでさらに向上していくと考える。